

ブローティガンと 彼女の黒いマフラー

川西 蘭



RAN KAWANISHI

ブローティガンと彼女の黒いマフラー

川西 蘭

RAN KAWANISHI

1960年、広島県三原市に生まれる。1978年早稲田大学政治経済学部経済学科人学。79年処女作「春一番が吹くまで」を河出書房新社より出版、以後80年「空で逢うとき」81年「はじまりは朝」84年「バイレーツによろしく」を同じく河出書房新社より刊行。1984年卒業。86年「妖精物語」「プロローティガンと彼女の黒いマフラー」をトレヴィルより、また「ラブ・ソングが聴こえる部屋」を集英社より刊行。87年最新刊『聖バレンタイン音楽堂の黄昏』をトレヴィルより刊行。血液型O型、星座・魚座。

著者 川西蘭

発行者 金田太郎

発行 株式会社トレヴィル

東京都豊島区南池袋2-47-4-1102 〒171 電話(03)971-6181(代表)

発売 株式会社リプロポート

東京都豊島区南池袋1-16-22 〒171 電話(03)983-6191(代表)

印刷 明和印刷株式会社

製本 島田製本株式会社

乱丁・磨丁本はお取替いたします。

© 1986 Ran Kawanishi, Printed in Japan, ISBN4-8457-0228-2 C0093

目次

海岸通りのホテル	7
シンギング・ガール	31
夕暮れの海風	41
夏の午後	57
意地っばりな雪女の話	75
シンデレラの手あみセーター	85
オータム・リーブス	103

★	バイバイ・ラヴ	踊る野球小僧	口の中の憂鬱	ビリヤード物語	冬の釣り堀	フローティガンと彼女の黒いマフラー
★	229	201	177	147	135	125

ブローティガンと彼女の黒いマフラー

海岸通りのホテル

二年前、ぼくはまだ学生で、一夏を海の近くにあるカフェ・レストランのウェイターとしてすごした。

友だちの母親が経営している店だったから、割合気楽に、けれど、ものすごく忙しく働くことができた。

その店は海へ向かう、あるいは、海から帰ってくる途中に立ち寄る客が多かった。午前中は何だかうきうきした感じが店内に漂い、夕方からは少し疲れた感じと潮の香りが漂った。

九月の終わりにぼくはウェイターをやめた。その頃になると、客の数も減り、人手

はいらなくなるし、ぼくの方も大学に行かなければならなかったからだ。

一夏分のアルバイト料を貰い（かなりの額だった）、その足で、すぐ近くのごちんまりとしたリゾート・ホテルに向かった。一週間ほどそこでのんびりとすごすつもりだった。夏の間中、他人の楽しそうな顔ばかり見続けたせいで、一週間くらいぼく自身楽しそうな顔をしてみたかったのだ。

夏の名残りが少しだけ残っているせいか、ホテルの部屋はほとんど埋まっていた。ぼくにあてがわれたのは、海に面していないツイン・ルームだった。窓から見えるのは、ホテルの中庭と間近まで迫っている山肌だけで、余り陽も射さなかった。

最悪のツイン・ルームだ。

それでもぼくは気落ちしなかった。海を見たければ、ホテルの外に出ればいいし、陽が射さなければ、灯りをつければいい。レストランもバーもコーヒールームも広くはないけれど、しっかりとしたものが備っていた。

チェック・インをした金曜日の午後は、ビールを飲みながら、本を読み、昼寝をして、だらだらとすごした。夜になると、新鮮な魚を使った料理を食べ、ウィスキーを飲んで、十時すぎには眠ってしまった。

いい若い者がすることではないけれど、そんなふうにしてみたかったのだ。

翌日は、朝から海に出た。

真青な空が広がる気持ちの良い秋晴れだった。風が時折強く吹き抜け、陽光はキラキラと輝いていた。

ぼくはホテルで借りた釣りざおを持ち、堤防に腰を下ろして、エサを買った釣り具屋で聞いた通りに仕掛けを作って、糸をたれた。何とか言う小魚が釣れるそうだけれど、魚の名前は忘れてしまった。

釣りに関して、ぼくはほとんど何も知らなかったから、魚はまるで釣れなかった。何度もエサを取られ、針にエサをつけては海に放り込んだ。

最初から釣れるとは思ってなかった。ぼくはただのんびりとしていただけなのだ。一日中、ぼんやりと釣糸をたれて、潮の匂いにつつまれ、陽光を浴び、そして、罐ビールを飲む。誰にも話しかけられないし、誰にも話しかけない。静かに時の流れに身をゆだねる。そういう予定だった。

午前中、二時間かかって、体長三センチの小魚を一匹だけ釣った。余り小さいのですぐに放してやったから、ぼくのビクは空っぽのままだった。

昼食を食べて、また堤防に戻り、ぼくは釣りを再開した。海辺にはちらほら人影が見え、ボード・セーリングの色とりどりのセイルが海の上を舞っていた。

一時間ほどした時、ぼくは一人の女の子が堤防に向かって歩いて来るのに気がついた。女の子は丈の長いひらひらした白いワンピースを着て（何だかベッドから脱け出してきたばかりみたいな感じだった）両手に一つずつサンダルを持ち、素足で砂の上を歩いていた。風に長い髪の毛があらわれていたけれど、彼女は乱れるにまかせ、気

にも留めていない様子だった。

くっ、と釣りざおに手応えがあり、糸が引き込まれた。来たっ、と思った次の瞬間、魚はもう逃げていた。

タイミングが遅れたのは、砂の上を歩いている女の子を見ていたせいだ。

ぼくはエサをつけて、ポチャンと仕掛けを海に放り込んだ。

白いワンピースの女の子はとことこと堤防を歩いて来て、ぼくから一メートルほど離れたところに腰を下ろした。

それから十分くらい彼女はぼんやりと海を眺めていた。大抵の人間が釣り人に対し、てそうするように、釣れますか？ と声をかけたり、ビクをのぞき込んだり、物珍しそうにうしろに立って釣りざおの動きを観察したりはしなかった。

仕掛けを引き上げ、またしてもエサを取られたことを確認してから、ぼくは煙草に火をつけた。しばらく、釣りは中断だ。

いい天気だなあ、とぼくは彼女に聞こえるように言ってみた。

彼女はふり向きもしなかった。ブランコに乗っているみたいにゆっくりと脚をぶらつかせているだけだ。

ふうっ、と煙を吹き出して、ぼくはあお向けに寝転がった。陽光であたためられたコンクリートにはふんわりとしたぬくもりが感じられた。

煙草を一本喫い終わる頃になって、いい天気だなあ、と彼女が言う声が聞こえた。

お腹すいたなあ。

ぼくはすいてないな。

あたしがすいてるの。

ぬっ、と彼女の顔が目の前に突き出された。まだ幼なさが残る可愛い少女の顔だった。ぼくは何だか彼女に押し倒されたみたいで、すぐには起き上がることができなかった。

「おじさん、元気？」

彼女の顔が引っ込んだ。

ぼくはできるだけぶざまにならないように余裕を持って上体を起こし、短かくなつた喫いガラを罐ビールの空罐のなかに捨てた。

彼女はにこにこ笑いながら、ぼくを見ていた。さっきまでのボーッとした（それでいてどことなく寂しそうな）表情が嘘のようだった。

「元気？」と彼女は手を振って、言った。

「元気だよ」とぼくは答えた。

「良かったね」

「うん、まあ、そうだね」

彼女はあらためてぼくのすぐそばに坐り直し、長くてとても柔らかそうな髪の毛を見せびらかすようにかき上げた。